



バプテスタの起源と信仰

渋谷敬一 著



バプテストの起源と信仰

澁谷敬一

1935年 宮城県にて生まれる。

福島大学、バプテスト神学校(福島) (二年課程)

日本基督神学校、ウェスタンBセミナー(神学修士課程修了)

福島バプテスト教会牧師、バプテスト聖書神学校(仙台)専任教師、

校長、仙台聖書バプテスト教会牧師、福島第一バプテスト教会牧師

現在:創世グループチャプレン、白石バプテスト教会協力牧師、

福島ベテルハウス福音館、独立伝道師

バプテストの起源と信仰

バプテストの起源

私達はバプテスト教会に所属し、バプテストである。それならば、バプテストとは何であり、誰であるのかと問うならば、答えは、そう簡単ではない。バプテスト教会の会員だから、バプテストの宣教師に導かれたから、では答えにならない。一般の人々は、水浸しのバプテスマをするのがバプテストだと考えているらしいが、それならば、モルモン教徒もバプテストだということになる。あるいは又、バプテストの名をもっているからバプテストなのかというと必ずしもそうだとは言いきれない。バプテストの名に値しないバプテストもあるからである。それならバプテストらしいバプテストとはどんなものであるのか？

P・ジャクソンはその著「教会政治論」の中で次のように定義した。

「……各時代を通じて、彼らが聖書的であると信じているある定まった教理的確信によって特徴づけられる人々(の集まり)を意味する。」そして、その教理的確信として次の八つのものを挙げている。

- 1、最高の権威である聖書
- 2、魂の自由
- 3、神の主権
- 4、万人祭司
- 5、新生した者のバプテスマと教会加入
- 6、主権的自律的地方教会
- 7、二種の役務
- 8、二種の儀式。

エドワード・オーバーベイも同様に、「今日バプテストと呼ばれている人々のある特徴的な信仰と実践を保持している人々のこと」と定義し、さらに、彼は、バプテストという名で呼ばれた時よりも、さかのぼってその起源を求めるべきことを主張してい

る。だが、このような定義や起源に関する主張は慎重でなければならぬ。単に、ある種の特徴を確信している人々のことであれば、初代教会は、皆バプテストであったろうし、バプテスマのヨハネもバプテストであった(?)ということになる。そして、今日でも福音教会とか、キリスト教会とか、聖書教会と呼ばれるものの中に多くのバプテスト教会があるということになる。しかし、そのような人々は、バプテストと呼ばないだろうし、呼ばれることは迷惑に違いない。

時代の流れは、各教派の特色が互いに影響しあって変様し、私達バプテスト自身の姿をも曇らせ、あるいは、その聖書的伝統を歪めてしまうことが現実である。だから、もう一度バプテストの歴史をたどり、その生い立ちに注目することによって、バプテストの起源及びそこにおけるバプテストの最も確かな原型を見出さなければならぬ。バプテストには歴史があり、起源があるのである。歴史は事実を持ち、その証拠となる資料を持ち、その資料を通しての解釈である。従ってバプテストの起源を尋ねる時に、様々な憶測からの理論は別として、明白な資料つまり証拠によって裏付けられる所から始めるのが妥当であると思う。

* 「バプテスト」という名

一体、いつごろから、個人又は集団をさしてバプテストと呼ぶようになったのであろうか。バプテスマのヨハネは英語ではジョン・ザ・バプテスト、16世紀のアナ・バプテスト、あるいはカタ・バプテスト、またセ・バプテストと呼ばれるいくつかの集団又は個人があった。それらは、近似性はあるが我々のいうバプテストではない。バプテストという名が一般の人々から呼ばれ、自らそのように名乗るようになったのは17世紀の英国においてである。1610年から1670年にかけての時期に、英国国教会から分離した人々のある集団に対して、幼児洗礼主義者たちが、アナ・バ

プテストないしはバプテストと呼んだのである。しかし、当初、バプテストの人々は自らをバプテストとは呼ばなかった。例えば、1644年の信仰告白では”一般にアナ・バプテスト(誤って)と呼ばれる教会”と言っており、1646年のそれを補足した告白では”その信仰の告白に基づいてバプテスマを受けたキリスト者の会衆”という一節が付してある。バプテストの歴史家 H・ヴェダーは、「1654年、ウィリアム・ブリッテンが発行した出版物の中で、公けに集団をさして”穏健なバプテスト”と呼んでいる」と語る。又同じ頃”バプテスト教理問答書”ができた。

こうした資料は、当時、分離派のいくつかの集団は、自分たちが大陸のアナ・バプテストと異なることを自覚していたし、又その時期にはバプテストとは名乗っていなかったことが明らかである。それではどうして、この信仰告白に基づくバプテスマを受けて集められた教会（彼らは、自分たちのことを gathered church-召集された教会と呼んだ）が、バプテストと呼ばれるようになったのであろうか。その詳細についてはあまり明確な証拠はない。少なくとも、彼らの一部は、オランダのアナ・バプテストと親交があったし、近似したものを持っていたので幼児洗礼主義者から、アナ・バプテストと呼ばれたのは理由のないことではなかった。とはいえ、彼らは決して、アナ・バプテストではなかった。教会史家 A・H・ニューマンは「アナ・バプテストと浸め(バプテスマ)を受けた信者(普通、アナ・バプテストは浸めの形式をとらない)との折衷案として、バプテストという名が徐々に使われるようになった」と説明している。一方、H・ウェダーは、「彼らは、人々からアナ・バプテストと呼ばれていたが、それと区別するためにその名を用いず、バプテスマを受けた信者とか、信仰告白に基づくバプテスマを受けたクリスチャン等と自らを呼んでいた。しかし、これらの呼び方が煩わしくなって次第に、人々のバプテスマという使い方に倣ってバプテストと名乗るようになった」と言う。

ともあれ、バプテストという名は、教会の総会とか大会とかで自ら採用したというようなものではなく、17世紀中葉の英国を舞台として、半ば自然発生的に出現するに至ったのである。我々はバプテストの起源を、このバプテストと呼ばれた人々が初めて出現する時代に求めるのが妥当であると信じる。そして、この人々がどのような信仰と実践をもっていたかを探ることによって、バプテストの特質と原型を見出だそうと思う。

当時の英国では、英国国教会派、長老派、独立派、会衆派などの諸集団があった。バプテストは、それらのいずれでもない。又バプテストはルター、カルヴィン、ジョン・ノックス、メンノ・シモンズ、ウェスレーの如き有力な霊的指導者によってきた教派でもない。バプテストは、英国の清教徒運動の中で、分離派、独立派の胎動の只中で、自然発生的ともいふべき出現を遂げたのである。

* バプテスト教会の始まり

さて、バプテストが国教会から分離し、会衆派や長老派でもなく、自ら召集された教会として存在した理由はどこにあったのでしょうか。(彼らは”召集された家””会合の家””契約者の会合”とかを好んで用いた。)その理由は、当時持っていた彼らの信仰基準ないしは信仰告白と、他の諸教派のそれとの比較によって知られる。もし、他教派と同じものであれば、信仰告白の条文は不必要だったし、種々な迫害、圧迫の中で分離した集会を持つ必要もなかった。彼らが自らの信仰告白を持ったのは「バプテストのグループは互いの中に区別があり、又他のプロテスタント諸派から区別するため、あるいは、その類似点を示すため」(W・ランプキン [バプテストの信仰告白] 16頁)であった。

この当時に作成された信仰告白の代表的なものは、1646年ウェストミンスター信条(長老派)、1563年三十九箇条(英国教会)、

1658年サヴォイ宣言(会衆派) 1644年(ロンドン告白)、1677年(第二ロンドン告白)、1660年(簡略信条)、1678年(正統信条)[以上バプテスト]などがあげられる。これらの諸信条を比較するならば、バプテストの信仰が他の信仰と全面的に異なるわけではなく、大部分は共通したものであることが分かる。例えば、”賢明かつ公平無私な読者へ”という表題の第二ロンドン告白の序文の中で「・・非常に明白な聖書の事実をもって彼らが確信した全体的プロテスタント教理において、我々は彼ら(長老派や会衆派のこと)に心からの同意をするものであり・・」とあるのは、彼らが、他のプロテスタント教派と大部分が一致していることを示しているのである。

しかし、異なっている点もあった。それは主として教会論、教会の靈的性格についての相異であった。具体的には、次の二つの点で他とは異なる特色があったことを知るのである。1.信仰告白に基づくバプテスマ、2.魂の自由(教会の自律的会衆政治、政教分離、信教の自由などを含む)である。バプテスマの様式は浸礼であるとするのは特にバプテストの特色というのではない。初期のルター派はこれを実行していたし、英国では、浸礼が17世紀中葉までは普通のことであった、と教会史家フィリップ・シャーフは語っている(教会史第八巻78頁)。英国祈蔵書の教義細目によると、エドワード IVやエリザベス女王は浸められたとある。エラスムスは”我らと共に”の中で「幼児は滴水される。英国では浸水される。」と語っている。初期バプテストは、この当時一般的だった浸礼の形式を継承したのである。17世紀中葉から、長老派の勢力が国教会の中に浸透して全般的に教会は滴水礼となったが、それ以前英国教会は浸礼を施していた。伝えられるところによれば、ウエストミンスター会議(1643~46)においてバプテスマの様式に関する浸礼か否かの論議は二分し、わずか一票の差で今日の告白の如く「当人を水の中に沈める必要はなく、バプテスマは水を当人に注ぎ、あるいは滴らすことによって正しく執行され

る。」(ウエストミンスター信仰告白 28の3)になったと言われる。

ある人々は、バプテストが浸礼の形式をとったのはこの時期でそれ以前は滴水礼であったと主張するのだが、それは必ずしも歴史的に確証されたものではない。J・T・クリスチャンは彼のバプテスト史の中で、「その当時のバプテストが滴水礼をしていたという証拠はなく、事実は逆である。宗教寛容となり、バプテストにも発言が許されるに及んで、初めて今までのバプテストの実践が正しいことを主張する機会を与えられたのである」と説明している。重要なことは信仰告白に基づくバプテスマ(浸めの形式)を主張した点である。

次に、信仰告白に基づくバプテスマと魂の自由をかかげて自ら”召集された教会”と名乗りをあげるに至ったバプテスト教会の事情を少し述べることにしよう。このようなバプテスト教会が数多く急激に出現しだしたのは、17世紀中葉の英国に於いてである事は確かであるが、それらの教会の全てが明白な起源を我々に伝える歴史的証拠を持っているわけではない。例えば、1644年の信仰告白(ロンドン告白)はロンドンにある七つの教会の代表者によって作成され、受け入れられたものであるが、七つの教会の凡てが、一つの母教会との関係でできたものではないし、さらにこの他にも、バプテスト教会は存在していた(J・T・クリスチャン”バプテスト史” 250頁)。この時期には非常な速さでバプテスト教会は増大した。勿論、その起源が明らかなものもある。それらのものは後述することにするが、ともかくも、現在私たちの知れる限りでのバプテストの起源を次のように結論することは妥当であると確信する。[1610年以後、その出版された記録による証拠によって、我々は跡切れることのない継続をみるのである。そして遅くとも1641年からは、バプテストの教理と実践が今日の我々のものと本質的に同一のものであった。](H・C・ヴェダー)

英国における初期バプテスト教会(1644～1689年)

この時代のバプテストの歴史を理解するためには、17世紀英国の歴史、特に政治的宗教的背景を知ることが重要である。というのは、前にも述べたように、バプテストはこの背景の中で半ば自然発生的に出現したものだからである。スチュワート家のチャールズ一世(1625～1649)の弾圧と強要は市民戦争をもたらした。議会王に反対して戦い、議会軍はついに勝利し、王は処刑された。こうしてクロムウェルの指導の下に、英国は政治的宗教的自由をしばらくの間与えられた。寛容の時期である(1642～1660)。1660年クロムウェルの死後、英国はチャールズII世を呼び戻して王とした。そして、かつての時代同様、監督教会を国教とした。クラレドン法典は非国教徒を公から追放し、又彼らの集会を禁止した。そして、1689年の名誉革命の時まで非国教徒には宗教上の寛容が与えられなかった。多くのバプテストは投獄、国外追放等の迫害を受けた。「天路歷程」の著者で有名なバプテスト教会の牧師、ジョン・バンヤンが迫害を受けたのはこの時期である。このような戦争、迫害による国内の争乱の只中でバプテストは生まれ育ったのである。他の非国教徒同様、バプテストもクロムウェル革命による寛容の恩恵に浴して大きく成長した。

英国における初期のバプテスト教会には、二つの流れがあった。一つは、普遍的贖罪を信じる普遍バプテスト(アルメニアン)であり、他は限定的贖罪と特定者救済の信仰を持つ特定バプテスト(カルヴィニスト)である。普遍バプテストは特定バプテストよりその出現が古く、急速に成長を遂げたが、一部は理神論哲学に影響されてユニテリアンとなり、他の一部は特定バプテストの信仰的立場を採用して、同化し、ついに特定バプテストは、その主流となった。アメリカのバプテスト教会は、この特定バプテストの流れを汲んでいる。

ここでは、英国における当時の普遍バプテストと特定バプテス

ト教会の生い立ちを紹介することにしよう。教会史を見ると、最初のバプテスト教会が語られているが、既に見てきたように自然発生的な起源を持つバプテスト教会であるから、厳密な意味では、ファースト・バプテスト(多くの人々はそれに関心を示し、それを誇るのであるが)教会がいずれであるかを決定することは困難なようである。というのは、最初の教会が出現したといれわる時でも、他に記録とか資料として残されていないいくつかの教会が存在したことは明らかだからである。”我々はこの当時、いくつかのバプテストの諸教会の始まりの歴史的証拠を持っているが、ファースト・バプテストの始まりの証拠はない。”(オーバーベイ、バプテスト小史60頁)従って、ここでは歴史的証拠によって裏付けられるいくつかの教会の始まりを一瞥することにする。

普遍バプテストの起源は、ジョン・スミスとトマス・ヘルウィズの二人の指導者に関係がある。スミスは英国国教会の按手を受けた教職者であったが1580年頃にロバート・ブラウン(分離派会衆主義の清教徒で信教の自由意志的契約による教会加入を強調した)伝道の下にできたゲンズボローの分離派会衆教会に自ら入って、その働きをなし、国教会から分離した。ヘルウィズとかジョン・マートンはこの群れのメンバーであった。1593年にはゲンズボロー、スクルービィ、その他の群れはジェームス一世の迫害のためにオランダに逃れた。

スミスは、アムステルダムにおいてアルメニウス主義の思想やメノ派の教会観を知った。彼は幼児洗礼の妥当性に疑問を抱き、それは聖書に反すると感じた。やがて、個人的信仰告白に基づいた新生した会員のみによって形成される教会という結論に達した。そして彼は、ヘルウィズその他36名の者たちと信者のバプテスマを採用することに決め、英国人による信者のバプテスマを採用した最初の教会をつくった。スミスはこの時、自分で自分にバプテスマをしたといわれる。教会史家のある人たちは、この時のバプテスマは、英国独立派やメノナイト派で実行していた灌水

礼によったと述べている。スミスがメノナイト派の権威によるバプテスマを願い、自分のやり方の非を認めた時に、このスミスの立場に不賛成だったヘルウィズとその幾人かの群れは、1609年頃スミスから分別し、ロンドンに帰った。そして、1612年に最初の普遍バプテスト教会を設立した。アナ・バプテスト的背景を持ち、又強いアルメニウス主義の神学を持っていた。1614年には、この教会の会員であったレオナルド・プッシャーが浸礼による成人のバプテスマを説いた。これは、特定バプテストの信条に採用されたよりも30年も前のことである。ヘルウィズは1616年頃捕われ、獄死したと思われる。こうした教会は急速に成長拡大し、反対者たちによれば1644年には約47の教会があったという。一時期オランダ・メノナイトと親交があったが、17世紀中葉以後はこれらの接触は止んだ。こうした道程においても、信教の自由、良心の自由を叫び続け、チャールズ一世のもとにあるロード大主教によって厳しい迫害を受けたのであった。

特定バプテストに関する記録の殆どは、最も初期のバプテストの歴史家トーマス・クロスビィの伝えることに基づいている。それによると、1616年、分離派清教徒でない独立会衆派であったヘンリー・ヤコブ(後に英国会衆派となる)とその群れの幾人かがオランダから母国英国に帰り、教会を設立し、ヤコブが牧師となった。1633年、幼児バプテスマの問題で、一部の者がジョン・スピルズバリーに導かれてヤコブの教会から分離した。1638年には、信者のバプテスマを土台として教会を設立した。そしてこの集会が、バプテスト原理を採用して、英国における最初の特定バプテストとなった。1644年のロンドン告白の起草代表者の一人であったウィリアム・キフィンはやコブ教会から分離してサムエルイトンの混合教会に1638年に加入したのであるが、彼は、バプテスマを浸めであると確信するに至った経過を次のように伝えている。「1640年の間に、リチャード・ブラウンとスピルズバリー氏の幾人かの会員と多分ジェシィ氏の教会(ヤコブの教会は

ジェシィが牧師となった)からの数人は、滴礼や注水礼によるバプテスマは、それが信者、成人、幼児のいずれに執行されるにしても使徒時代になされたバプテスマの形式ではなく、”葬りと復活を象徴する水の中に身体を投入することによってなされるべきである”と確信するに至った。こうして1644年のロンドン告白の中で、このバプテスマの固有な形式は浸めであることを明言した。この告白は又、アナ・バプテストや普遍バプテストとは異なることをも明らかにし、地方教会の独立自治、信教の自由、公民の義務などをも含んでいる。1644年にはロンドンに七つの教会があった。1689年には107人の教会代表が第二ロンドン告白(※)に署名している。浸めの形式を復活させることによって、バプテストは今や、アナ・バプテスト的先祖から分離して新しいステップを踏み出したのである(R・トーベット、「バプテストの歴史」43頁)。H・ヴェダーが「遅くとも1641年からはバプテストの教理と実践が今日の我々のものと本質的に同一のものであった」(バプテスト小史201頁)と語ったのはこのことである。

普遍バプテストと特定バプテストは、互いに交わりや協力関係がないままそれぞれ成長していった。1644年以後両バプテストの信仰告白、信条は数多く作成された。かくしてバプテストは、当時他の教派にはみられないある種の異なった特質を確立したのである。こうした特質を持つに至ったことは、当時の英国のヒューリタン革命とそれに続く歴史に目をとめるなら容易に理解できる。

1. 「見える教会」は「見える聖徒たち」によって構成されるべきこと、つまり「召集された教会」であって、契約をもって独立、自治の限定された会員をもつ。
(教区会員とか教区教会に反対)
2. 会衆派は教会員を信者にだけ制限しようとしたが、徹底せず、教会員の子供に洗礼を施し続けた。しかし、幼児洗礼

は集められた教会の考えに矛盾する。

(幼児洗礼否定)

3. 国家の援助を享受せんとすることを期待しながら、英国国教会から分離しようとした。それは虫のよすぎることで不可能であった。”集められた教会”は国の支配から自由である。

(政教分離の原則、信教の自由)

4. 見える教会は新生する会員によって構成されることによって見えない教会により近づくと考えたから、それは信者のバプテスマ、個人的信仰告白に基づくバプテスマであり、従ってたとえそれが信者の子供であってもバプテスマによって会員とされるべきでない。当然のことながら、バプテスマは浸めによることが正当である。

(浸めによる新生せる教会員)

こうした理論的思想的発展の結果としてバプテスト教会は生まれてきたのである。

(※) この告白は、迫害下のロンドンで特定バプテスト教会代表が1677年に匿名で作成し、信教の自由となって後イングランドとウェルズの107の特定バプテスト教会がそのまま採用したものの。

バプテストの信仰

一般に「バプテスト」という名称は日本人に馴染なく、そのため「福音」「キリスト」「聖書」などの言葉を附加している。しかし「バプテスト」という名が解りにくいからといって除いてしまうことは問題である。なぜなら、「バプテスト」という名は

歴史的なバプテストの信仰や伝統を代表し、総称しているからである。それは単に米国のバプテストの宣教師によって出来た教会や信仰を意味するものではない。16世紀の宗教改革から17世紀に至る全面的な聖書主義の立場に立つ人々の信仰の継承を含んでいる。ビンに張られたラベルはその中味を表示する。ラベルの名はビンの中味を保証している。同様に本来「バプテスト」の名は、歴史的聖書的なその名にふさわしい信仰の内容を表わしているのである。バプテスト教会とは、私たちが聖書的であると信じる、ある明確な教理的確信によって特徴づけられる人々の集り(P・ジャクソン)である。

それでは、その特徴とされる教理的確信はどのようなものであろうか。以下代表的なものをあげてみよう。「聖書の全面的權威性と正確性」「魂の自由」「神の主権性」「新生信者による会員制」「独立・自治の地域教会」「二種の役務者」「二種の礼典」「政教分離」「万人祭司性」などである。

こうした特徴的教理のあるものは、バプテスト以外の教派教会においても信じられているが、バプテストはその全部を信じ実践している。特に新約聖書を中心にして、徹底的にラジカルに聖書的であろうとする人々なのである。以下これらの教理的特徴について簡単に解説することとする。

1. 聖書の全面的權威性と正確性

バプテストの特徴的信仰として第一のものは「聖書の全面的權威性と正確性」である。歴史的にバプテストは、特に新約聖書を中心に聖書的であろうとして、血の代価を払い、ラジカルに真理を擁護し実践してきた。聖書は神の言葉を含むものではなく神の言そのものである。従って、教会において聖書は最高の權威であり、全ての教理、実践はこのみ言の主張に全面的に服従しなければならない、とバプテストは信じた。彼らは、当時のローマカト

リックや宗教改革者たちの一般的実践に反対して、バプテスマは信仰告白に基づいて施されるべきだと考えた。従って聖書にない幼児洗礼は拒否したし、バプテスマの様式は浸礼であるとして譲らなかつた。新生信者による会員制の教理は、聖書の主張に忠実に服した結果なのである。政教の分離、良心の自由、独立自治の会衆政治形態などの原理はすべて、聖書に服したバプテストの信仰の中から出てきた。

初期の英国バプテストの指導者W・キフィン(1643年)は聖書を忠実に調べた結果「つまり、最も安全な道は・・・・キリストとその使徒達の定めた秩序、そして原始教会のクリスチャン達がその時代に実行したことに従うことである。私が発見したことによれば、回心の後で彼らはバプテスマを受け教会に加えられ・・・・」と述べている。1644年のバプテストの第一ロンドン告白第七条は「神の礼拝と奉仕についての知識と服従の道、およびすべてのクリスチャンの義務は、人間的発明、工夫、法律や制度、伝統ではなく、聖書の中にある神の言によるものである」と宣言している。彼らの聖書的实践は教会生活にも及び、礼拝に出席しない信者、不信者と結婚した者、偽り誓って悔い改めない者を除名した。バプテストは神の言に全く服従する神の民である。「神が聖書を通して救いや教会について語るときには、神が絶対的権威をもって語る故に聞かなければならない。そこには種々人間の意見の入る余地はない。・・・・凡ての信条、告白、教職者そして多数決といえども、聖書に啓示された神の御意志に服さなければならぬ。」(「バプテストとはだれか」)

私たちは、本当に聖書的なバプテストなのだろうか。果たして、今実践していることは聖書の教えなのだろうか。バプテストとは「聖書のみ」の信仰を忠実に実践する人々なのである。

2.良心の自由、魂の自由

バプテストの特徴的信仰としてあげられ第二のものは「良心の自由」あるいは「魂の自由」と呼ばれるものである。初期の英国バプテストの信仰告白(1677年)は、この「良心の自由」について次のように告白している。「神はただひとりの良心の主であって、御言に反したり、み言に含まれていない人間の教義や戒めから良心を解放された。従って、(信仰)の良心を離れてこのような教義を信じたり戒めに従ったりすることは、神が与えておられる良心の自由や理性を損なうことになる。また盲目的信仰や、絶対的な盲目的服従を要求することは、良心の自由や理性を破ることになる。」

「良心の自由」という信仰は、神によって罪から解放された信者は、自発的に神に近づき心から神に仕え、他の何ものからも強制されることのない魂の自由が与えられている、とする確信である。それは、何よりも「人に従うよりも神に従うべきである」(使徒5:29)という真理に基づいている。すべての人間は個人的に神に対して責任を持っているのであり、どんな人間、教会、聖職階級、政府と言えども、個人の良心の代理を務めることはできない。人は自分で聖書を読み取り、自分で決断し行動する。そして自分の生活の一切について神に対して申し開きをする責任があるという教えである。こうした個人の魂の自由は、宗教(信教)の自由、礼拝、集会、言論の自由、政教分離などの原則に深く関わっている。

バプテストは自らの自由ばかりでなく、他の人々の自由のためにも戦ってきた。世俗の権力がこの良心の自由を圧迫したため、多くのバプテストは血を流した。トマス・ヘルウィズ、ジョン・バニヤン、ジョン・ミルトンなどは獄死、投獄、職業を奪われるなどの迫害を受けた人々である。さらには、信教の自由を求めて新大陸に渡った清教徒たちでさえ、バプテストの自由に反対し、迫害したのである。

このような「良心の自由」は、しかしながら、無制限や、放縦

を意味してはいない。それは聖書によって、また、隣人の自由や権利によって制約されることを忘れてはならない。自ら確信することが教会の教理や実践と異なるという、教会の一致を乱し、分派、分裂行動に出る自由はない。他の兄弟たちも、自らの確信を主張する自由や権利があるからである。従って、良心の主のみ前に、自らの確信が教会の信仰と合わないならば、その人は平和のうちに群れから離れるべきである。バプテストは、自分たちの自由を主張するが、他人の自由も尊重する。すべての人が立つか倒れるかはその主人である神との関係によって決まるのであるから、バプテストはその自由を各自の責任に委ねるのである(ロマ14:4)。

3. 神の主権性

バプテストの特徴的信仰としてあげられる第三のものは「神の主権性」である。これはおおかたのバプテストが持つ、主要教理のひとつで、他の多くの教派グループから区別される特徴である。

神は知的、理性的存在であって、人間や宇宙に対して計画を持ち、その計画を実行する主権者であられる。多くの他のグループは、人間の自由意志を強調するあまり、神はその計画の実行を、人間の気まぐれな意志決定に任せているかのように考えている。それは間違いである。私たちは、罪人が神を求めるよりも神が罪人を尋ね求めていると信じる(ロマ3:11)。無限の恵みによって人間のために救いを備えられたのは神である。神は世界の基の始まるはるか以前から、キリストにあって一人一人を救いに選ばれたのである(エペソ1:4)。キリスト信者が永遠に保持され、神の力に守られることを私たちは信じている(1ペテ1:5)。王の心も主によって定められる(箴21:1)。真の神はその知恵と力と恵みにおいて主権者であられる。

神は御自身の良しとしたもうことは何事でもそれを行なうためにあらゆる被造物の上に至高の主権的支配権を持ち、神の目には、すべてのことが明らかであり、神の知識は、無謬無限であり、いかなる被造物にも依存することなく、従って、神には何ひとつとして、偶然とか不確実なものはない(第二ロンドン告白 3・1)。ある人は、この真理に対して不満を持ち、神の意志を私たちの種々な計画や考えによってどうにでも変えられると信じて、神の取り扱いから自分の身を守ろうとしている。これは不信仰の罪以外の何ものでもない。一体、全宇宙の審判主に、そのような主権性が無いとでも言うのだろうか。

この神の主権性の教理は、運命論を意味しない。神の計画は、盲目的偶然の産物ではない。無限の知恵を持っておられる神が、事を成し遂げられるのである(エペソ1:11)。だから、ある人々の言うように、この信仰が宣教のヴィジョンを弱くするか、救霊の情熱を無くするということはない。事実、神の主権を信じるバプテストほど宣教のヴィジョンに生きてきた人々はいない。人を永遠の生命に定めるお方が(使徒13:48)、奉仕を命じ(ヨハネ15:16)、キリストを伝えるために私たちを召し、派遣されるのである(ヨハネ 6:44、ロマ10:12~15)。

“あなたの道を主にゆだねよ、主に信頼せよ、
主が成し遂げてくださる。”(詩篇37:5)

4. 新生信者の会員制

バプテストの特徴的信仰の第四のものは「新生信者の会員制」である。教会は霊的共同体であって(1コリント 12:13)、社会的、経済的あるいは政治的組織ではない。教会は新生した信者が信仰告白に基づく浸水礼(バプテスマ)を受けて集められた団体である。言うまでもなく、み言を宣伝し、主を礼拝することは生まれ

変わりのない者には不可能である(Iコリント3:16)。
監督教会、長老改革派教会では、片親が信者であればその子供に幼児洗礼を授け、教会員にする。親が信者であればその子は自動的に神の国に入っているとみなすのである。このような考えは聖書の教えに反しており、全く支持されることはない(使徒18:8)。12才になって堅信礼を授けるが、それも再生に代わることはできない。聖書は明らかに信仰告白に基づくバプテスマと教会入会を支持している(使徒2:41-47)。信仰告白のできない幼児がバプテスマを授けられた事例はひとつもない。それにもかかわらず、「信仰告白者のみでなく、信仰を持つ片親または両親の幼児たちもバプテスマを授けられるべきである」と述べ、「バプテスマは子供とその親との有機的結びつきからその幼児にも授けられる」と主張するのである。バプテストはこうした考えに強く反対してきた。聖霊によってキリストの体に受け入れられるということは、自然的誕生に自動的に伴うことではない(ヨハネ1:12、13)。各人は、個人的に信仰を告白し、新生体験がなければならない。神の救いの恵みは親から子供へと自動的に遺伝するのではない。聖霊のバプテスマという新生体験をした人だけがキリストの体に受け入れられる(Iコリント12:13)。従って、見える教会は新生信者の集まりであり、信心深く、良き業に励む人々の集まりである。新生しない人々、世的で、罪を犯している人々を教会が受け入れ温存して、キリストの御名を汚してはならない。教会に新生しない者が入り込むならば、教会の福音的教理と実践はたちまちにして腐敗したものとなり、聖霊を悲しませ、教会の霊的力は弱くされる。そしてついにはこの世と同じ社交場と化してしまう(テトス2:11～15、3:1～14)。

新生信者のバプテスマによる教会入会という真理は、教会の存続にとって最重要であることを、バプテストは主張し続けてきた。教会成長を願うあまり、教会員の人数を増やそうとすることから、新生体験を無視することのないように警戒の目をもって見

張るべきである。

5. 独立自治の地域教会

バプテストの教理的確信としてあげられる特徴の第五のものは「独立自治の地域教会である。監督政治や長老政治と異なり、バプテストは地域教会の主権的独立または自律的権威を主張する、会衆による政治形態を採る。

聖書は、地域教会が、主権的な独立自治をそれ自体の中にもっていることを明らかにしている。従って、ひとつの教会や団体が、他の教会を管轄することは全くなく、すべての地域教会は対等の立場にある。聖書は地域教会の上に立っどんな権威も認めていない。(マタイ18:17、黙示1:4)。

バプテストの信仰告白は「地域教会は、自治の絶対的権利を持ち、どんな個人や組織における階級制度の干渉からも自由であること」と記す。こうした自律的教会の概念は、万人祭司論の帰結である。万人はキリストの祭司として平等に仕えるものであり、教会の首であられるキリストに対して、地域教会の構成員は、み言とみ霊によって示される主のみ旨を判断し、遂行する義務を託されている。だから牧師や執事あるいは役員会が教会政治における決定権を持っているのではなく、その会衆が持っている信じ(IIコリ8:19)。

教会が事を推進するには、全教会の一致が必要となるから、時間がかかる場合が多い。ストロングは、一致のために、み霊により頼み、忍耐強く待つこと、説得すること、祈ることを勧めて「穏やかで平和のうちの一致はクリスチャンの心における聖霊の働きの結果である」と述べている。

バプテスト教会が主権的独立、自治の地域教会を信じているといっても、それは孤立主義や完全独立主義の立場をとるものではない。歴史的には、バプテスト教会は、諸教会との交わりにおい

て相互依存の責任を積極的に果たしてきた。「真の教会が互いに協力し合って信仰のために闘い、福音の進展のために力を合わせることは聖書的である。」だから保守バプテスト同盟の協力体制はいよいよ強力につくられていくべきである。しかし、このことは、同盟の事務局(役員会、委員会等)の手中に権力が集中するような事態とならないように、注意しなければならない。協力は地域教会の主権的自律性が確保される限りにおいてである。だから、自律性が危うくされる時には、それが教理的であれ、实际的であれ、そうするに十分な理由のある時には、他の諸教会との交わりを断ったり、連合(同盟)から脱退することもあるわけである。

かくして、バプテスト教会の主権的自律性は、各個教会が聖霊の導きの下にその意志を決定する場合で、それは唯一の究極的決定である、という点に明らかに見ることができる。「各個教会は、この協力の手段と方法に判断を下す唯一の権威であること、地域教会の意志は、聖書の導きの下に究極的なものである」(ニューハンプシャー宣言)

6.二種の役職・牧師と執事

今日のバプテスト教会は、二種の役職を認めている。1689(1677)年の信仰告白は「教会によって選り聖別され、キリストが定めた役務者・・・監督あるいは長老、および執事である」(26項8節)と、うたっている。教団教派によっては、もっと多くの役職がある。教会の規模が大になると必要に応じた種々な役職が設けられる。しかし、聖書を注意して読むならば、牧師(監督あるいは長老)と執事たちが、初代教会における基本的な役職であったことがわかる(ピリピ1:1)。

教会成長学の発展に伴ない、牧師の働きも分散され、複雑多岐になってきた。教会経営学とも言うべき、組織運営の効果的方法

を身につけることが要求されている。牧師は、種々な内外の委員会などの会合に出席することで大部分の時間を費やし、本来の牧師としての働きが十分になされないという現状にある。本来、牧師の働きは「聖徒を整えて奉仕のわざをさせ・・・キリストの体を建てあげる」(エペソ 4:12)ことにある。つまり、礼拝の説教、聖書教育、個人の魂の世話、そしてキリストの体である教会の総監督である。だから、「教会成長」に振り回されずに、魂の癒しという本来的教会の働きを回復すべきである。

牧師の役割をより良く果たすためには、霊的品性と深い神学的知識また人々のニードに応える広い素養がなければならない。バプテストの歴史をみると、教会は、教職者に対して按手試験と按手礼を与えて、バプテストの牧師として公認した。だから、神学校卒業が、自動的に牧師の資格を持つことではないのである。私たちの保守的バプテスト教会においてもこうした良き伝統が築き上げられるなら、必ずや牧師の質的向上と教会の成長に役立つものとなるであろう。

執事の起源は、恐らく使徒6章1-7節にある。七人の選出においてその霊的信仰的資格が与えられている(Iテモテ3:8-13参照)。執事の職は、名誉職ではない。僕として仕える、という実務的働きをすることである。彼らは牧師の補佐役として、牧師とともに病める人、悩める人を訪問し、財政を取り扱い、主の晩餐で牧師を助け、その他教会に必要な奉仕を喜んでする人々である。主は彼らの働きを祝福される(Iテモテ3:13)。彼らは牧師を助けて教会に仕える人であって、牧師の監視役や批評家ではない。牧師も執事も、主から託された尊い職責を自覚して互いに一致をもって仕えるなら、教会は祝福される。

7. 二種の礼典・バプテスマと主の晩餐

他のプロテスタント諸教派同様、二つの礼典を信じてきた。即

ち「バプテスマと主の晩餐」である。米国バプテストは、 sacrament(秘蹟または聖礼典)の用語をさけて、オーディナンス(制度・定めの意味)礼典を、好んで用いている。理由は、 sacramentが儀式を通して魔術的な力が与えられるという印象を持つためである。礼典という言葉も聖書にあるわけではないので、「バプテスマ」と「主の晩餐」とそのまま呼ぶ場合もある。

バプテストの信仰は、「バプテスマ」も「主の晩餐」もともに、内的、霊的恩恵の外的、可視的な象徴として受けとめる。

バプテスマは、主のみ名において信者を水中に沈める礼典であるが、その意味は私たちが救い主を信じて、彼の死と葬りとよみがえりにあずかることを表明している。バプテスマは、悔い改めと信仰をもって、心からキリストに服従するという信仰を示す手段である。信者のバプテスマであるから幼児洗礼はしない。バプテスマの型が「浸礼」であることは、聖書的にも明らかに支持されている。浸礼に反対する人たちは、型式が重要なのではなく、本質が重要であると主張する。型は最もよくその本質的意味を表わすためにあるのだから、型式がどうでもよいのではない。聖書のバプテスマは浸礼以外のものを知らない。言うまでもなく、信仰告白に基づくバプテスマは、地域教会加入の先行条件である(マルコ 16:16)。

「主の晩餐」は、キリストが再臨されるまでキリストの死を記念して繰り返される象徴的儀式である。主の晩餐の中心的意義は何であろうか。Iコリント11章を見ると、信者がパンと杯にあずかるとき、キリストの救いの出来事(キリストの死と復活と再臨)を描き出しつつ、信者はキリストの体なる教会の交わりにあずかるのである。

また、信者がパンと杯にあずかる主の食卓において、神の臨在の意識が強くされ、力と確信を与えられる。だから、主の晩餐は単なる記念ではない。第二ロンドン告白は「この礼典を受けるにふさわしい晩餐者は、外的にはこの礼典の見ゆる要素にあずかり

ながら、内的には信仰により現実にもまた実際に、しかも肉的や有形的にはではなく霊的に十字架にかかりたもうたキリストを彼の死のすべての祝福をうけて養われる(Iコリント11:23～26)」、と述べている。言うまでもなく、無知で不信仰な人々は、キリストとの交わりにあずかれないのは当然である(Iコリント 11:27)。

8. 政教分離

教会と国家の分離(政教分離)の原則は、バプテストの特徴的信仰の第八番目のものである。この原則は簡単に言えば、国家は教会の信仰に干渉してはならないし、また教会は国家を支配してはならないという意味である。つまり、教会も国家も、それぞれ異なった種類の権威や責任の領域を持っているのであるから、各々の固有な方法で自分たちの目的を達成するように努力すべきである。

国家が宗教的目的達成の手先となったり、教会が国の目的達成の手先となったりしてはならない。国家がその権能を行使するのは、国民の福祉のための世俗的業務についてであって、宗教的な事についてではない。もしそんなことがあれば、聖書の教える信仰の自由、良心の自由を犯し、束縛することになる。これは教会と国家に関するバプテストの主張してきた信仰であるが、それはまた極めて新約聖書的原則なのである。「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい」マタイ(22:21)、「人間に従うよりは神に従うべきである」(使徒5:29)。

米国バプテストの祖ロジャー・ウィリアムズは、米州議会が教会に干渉したことに反対し、行政長官は個人の宗教に対して何らの権限も持たない、と主張したために迫害を受け追放された。しかし、苦難を通して、ついに信者の自由を勝ち取った。歴史家ケアンズ博士は、ウィリアムズの最大の貢献は教会と国家の分離と

良心の自由のために闘った点にある、と述べている、歴史的に、バプテストは信教の自由のために闘ってきたのである。

私たちは政治と宗教の絶対的分離を主張しているのではない。世俗の法律に従うべきである。しかしながら、国家も教会も、それぞれの権能や目的行使の領域をよく弁えて、互いに他を犯さないようにすべきである。私たちの税金は、靖国神社の玉ぐし料のために納めているのではない。政府高官や地方自治体が特定宗教のために、それが教会のためであっても、どのような形であれ公金を使うことは政教分離の原則に違反することである。岩手靖国訴訟(注)はこうした良心のための戦いなのである。バプテストは神のみ前での個人の魂の自由を高く掲げてきた。この自由のためにたとえ迫害や犠牲があるとしても、不断の警鐘とならなければならない。それは聖書的主張である。

(注) 「靖国公式参拝は違憲である」 仙台高裁で実質勝訴
(岩手靖国訴訟：1981-1991渡部敬直牧師その他)

9. 万人祭司性

すべての信者は神のみ前に等しく祭司である、という主張は「万人祭司」という語で広く知られている。教会はキリストのひとり体であって、その体全肢体は賜物、奉仕の種類が異なっても、主に対しては同等の関係にある。従って、特権的聖なる祭司階級だけが神のみ前に出ることができ、人々に恵みを与えることができるというような考え方に反対する。マルチン・ルターは、宗教改革においてこのことを強く主張した。

この教理が全く聖書に基づくものであることは、黙示1:5、6や、Iペテロ2:1~10を見ると分かる。聖書は、キリストを信じ頼る人が、イエス・キリストによって、神に受け入れられる霊のいけにえをささげる聖なる祭司であると教えている。だから、神に

近づくためにイエス・キリスト以外の仲介者を必要としない(1テモテ2:5)。私たちはキリストを通して直接に、自分自身をささげ、感謝に満ちたみ名をたたえる唇の実をささげるのである(ロマ12:1、ヘブル13:15~16)。

ルターの改革は、ルター派の職制やカルヴィン派の教会法となり、教職と信徒の区別を再び主張したことによって未完成に終わってしまった。そうした中でバプテストは、すべての信者はキリストにあっては霊的に同等な兄弟姉妹である、という聖書的確信に基づいて教会を建てあげてきた。教会のあらゆる活動は、各自の職責、賜物の違いはあっても、万人が祭司として奉仕しているのである。従って、バプテストは、礼拝、伝道、教会政治は会衆全体の責任である、と考えている。すべての会員は教会の働きの決議に責任をもって参加する機会が与えられる会衆政治形態もまた、万人祭司性からくるバプテストの実践である。

万人祭司性が聖書の主張であるとはいえ、教会の秩序として、預言者や牧師教師、伝道者などの職務があり、彼らもまたその他の人々と同様に主への奉仕者である。万人が祭司であるが、すべての人が指導者ではない。バプテストは、キリストが教会に与えた賜物の違いを認める。聖徒たちは、牧師の指導に服従して整えられ、各自の賜物が生かされて、奉仕活動に参加し、キリストのからだ全体を建てあげる。すべての新生信者は、生ける教会の活動的な会員であり、主の生ける奉仕者である、というのがバプテストの信仰である。

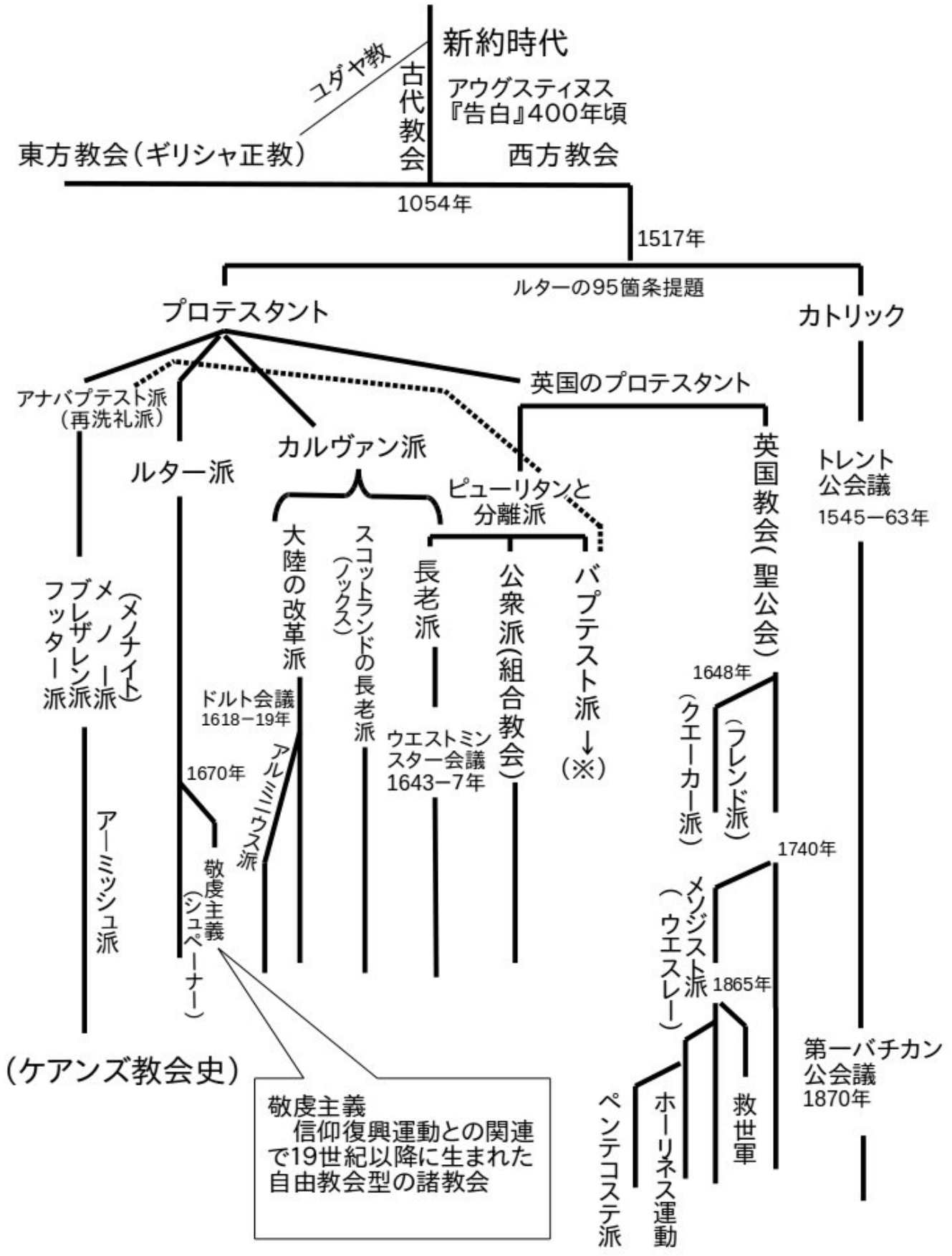
あとがき

この小冊子は、私がバプテスト聖書神学校（現仙台バプテスト神学校）の専任教師として、また仙台聖書バプテスト教会の牧師として奉仕していた時に教会の連合体の機関誌“保守バプテスト”に掲載したものに手を加えたものです。第二ロンドン告白（1677年,1689年）に表明されたカルビン主義バプテストの信仰を共有する諸教会、諸兄弟の身元証明（バプテストの信仰）の一助となればと願ひ出版することにいたしました（内容については様々な異見があることを承知の上で）。

65年前、バプテストの宣教師に導かれて回心し、今日まで聖書と取り組みながら、バプテストの信仰に目覚め、確信し、生かされて来た主の恵みに感謝いたします。なお、本小冊子の印刷にあたっては、私が協力牧師として奉仕している白石バプテスト教会（単立）の佐藤淳兄が印刷、製本に至るまで、全面的に協力をして下さいました。心から感謝いたします。

2019年 晩夏 澁谷敬一

<近世における教会の主な流れ>



新約時代

アウグスティヌス
『告白』400年頃
西方教会

古代教会

ユダヤ教

東方教会(ギリシャ正教)

1054年

1517年

ルターの95箇条提題

プロテスタント

カトリック

英国のプロテスタント

ルター派

カルヴァン派

ピューリタンと
分離派

英国教会(聖公会)

トレント
公会議
1545-63年

アナバプテスト派
(再洗礼派)

メノナイト
ブレザーレン派
フッター派

大陸の改革派
スコットランドの長老派
(フックス)

長老派

公衆派(組合教会)

バプテスト派
↓
(※)

ドルト会議
1618-19年

アルミニシス派

敬虔主義
(シユペーナー)
1670年

アーミッシュ派

クエーカー派
(1648年)

フレンド派
(1648年)

メソジスト派
(ウエズレー)
1740年

1740年

ペンテコステ派

ホーリネス運動

救世軍

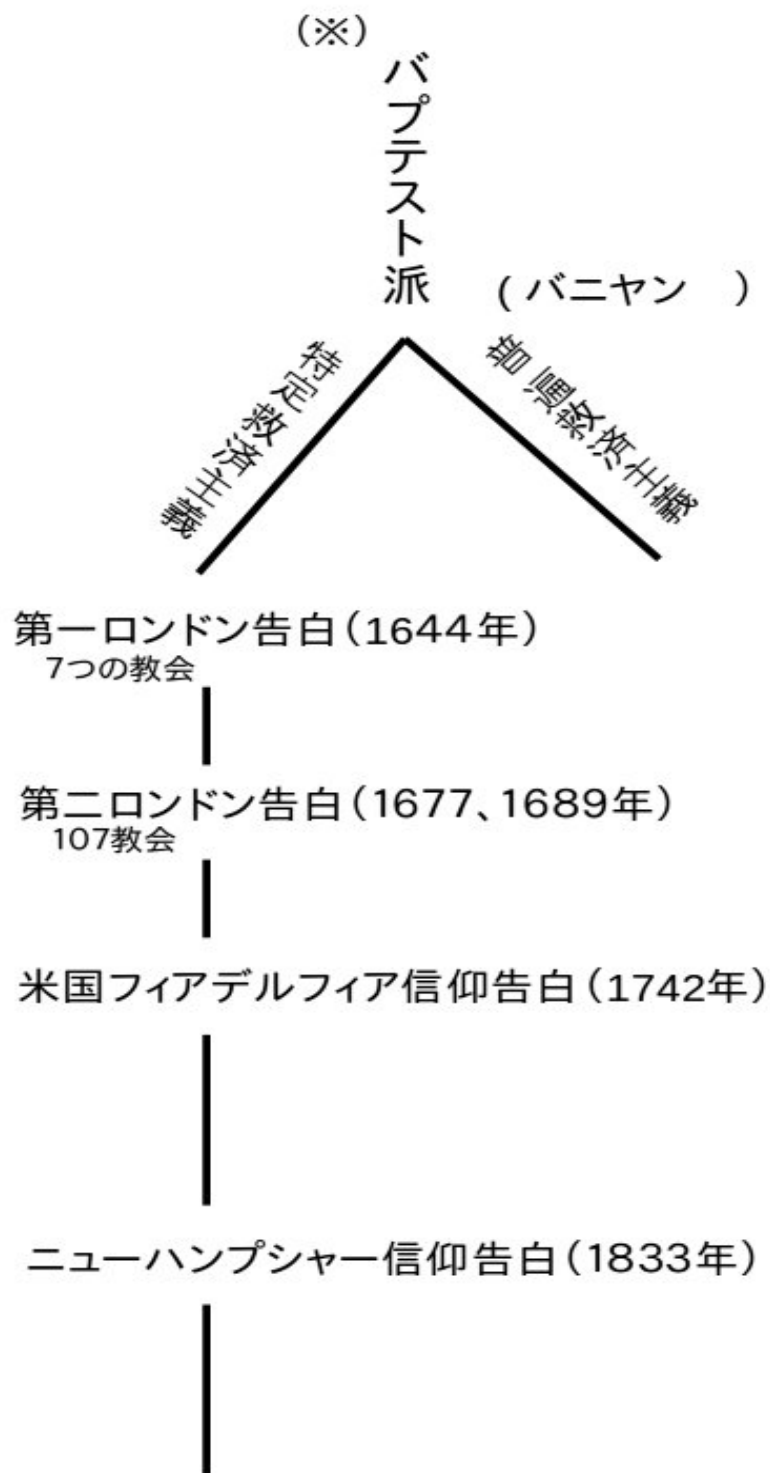
第一バチカン
公会議
1870年

(ケアンズ教会史)

敬虔主義
信仰復興運動との関連
で19世紀以降に生まれた
自由教会型の諸教会

(左図よりの続き)

<バプテストの流れ>関連図



一参考文献一

- 「バプテストの信仰告白」 斎藤剛毅 ヨルダン社
「信条集」1(後編) 新教出版社
「第二ロンドン告白」(1689) 鈴木昌 東京聖書教会
「バプテスト教理問答書」 同上
「バプテスト初歩教理問答書解説」 上山雄治
「バプテスト教会史」J、Tクリスチャン バプテスト文書刊行会
「キリスト教全史」É、ケアンズ 聖書図書刊行会
「キリスト教の展開」石原謙 岩波書店
「教会史」J、ロルツ ドン・ボスコ社
「キリスト教史」II 半田元夫 山川出版社
「日本基督教会史」 柳田友信 聖書図書刊行会
「バプテスト教会の形成」 N, メアリング、W、ハドソン
新教出版社
「バプテスト教会の起源と問題」 斎藤剛毅 ヨルダン社
「近代バプテスト派研究」 高野進 ヨルダン社
「バプテストとは誰か」B、シェリー、W、カー
バプテスト聖書神学校
「バプテストハンドブック」J、マクダニエル 保守バプテスト宣教団
「組織神学」 H、シーセン 聖書図書刊行会
Baptist Confession of faith W Lumpkin Judson Press
A manual of church history A、H Newman ABP Society
History of the christian church P. Schaff Eerdman
A history of the Baptist R J Torbet Judson Press
A Short History of the Baptist H, C, Vedder Judson Press
A History of Conservtive Baptist B, Shelly C B Press
A Brief History of the Baptists È, Overbey I, B, Pr
Doctrine of Local Church P. Jackson RegularBap Press
The New Directory for Baptist Churches È, Hiscox J Press
Systematic Theology A, H, Strong Judson Press
Christian Theology(邦訳あり) M、Eerickson Baker



